

□議員名：白井 健一郎

1 J R 小野田駅の諸課題について

論点	1 日乗降者数二千数百人、全市的利用のある小野田駅について、市民生活の利便性確保という最も大切な視点から問う。まず、周辺住民の長年の悲願である北口改札の設置についてどうか。
回答	用地の確保や実現までに長期間を要し、多額の整備費用等も見込まれることから、現時点で事業化は難しい。県内の光市の例では既存の光駅を南口にし、北口に新たな改札口を設け自由通路、南北の改札口の駅前広場等を整備する概算費用として40億円から45億円と公表されている。

論点	光駅の事情は、南北口にロータリーを造り、非常に立派な駅舎をまちづくりの一番の大きな目玉としてやっているとは私は自覚している。小野田駅においては、北口にちょっとした出口を造ってほしいというだけだが、それでも40億円から50億円ぐらいかかるか。
回答	具体的な費用は算出していないが、小野田駅の北側には市が土地を持っていない。また、もしバリアフリー化をするのであれば、新たに連絡橋を造り直してエレベーターをつけなければ無理なので、今ある既存の連絡橋に少し継ぎ足して、北口を造ればいいのかということは無理がある。

論点	厚狭駅にはバリアフリー新法により新たなエレベーターが設置された。小野田駅にエレベーターを設置することについては、市民は前向きな見通しを持てるのか。
回答	小野田駅については1日の乗降客数が3,000人未満で、JR西日本に確認したところ、「現在は1日の乗降客数が3,000人以上の駅を最優先にバリアフリー化工事を進めているところ」という状況にあることから、現時点では小野田駅へのエレベーターの設置について検討する段階にはない。

論点	山陽本線の本数につき、6時から23時まで1時間1本程度、通勤、
----	---------------------------------

	通学時間は増便という現状は死守すべき。山陽本線と小野田線の運行時間や運行本数につき、市としてどう捉えているか。
回答	山陽本線の便数確保については、毎年沿線学校等のニーズを取りまとめ、山口県を通じてＪＲ西日本に要望を行っている。小野田線については、コロナ禍が明け、市民や学生から、最終便の増便に関する要望が多く寄せられているため、宇部新川駅発の２１時台の最終便の実証運行の実施に向けて協議を行っている。

２ 市内（特に小野田駅前）のインターロッキングブロック舗装と都市計画について

論点	ブロック舗装は、街路樹の生育による凹凸、雨水枡周辺の沈下を招き、数センチメートルのずれを生じるため、高齢者や障がい者が安心して歩行できない要因になっている。ただ、歩道の問題は市全体の都市計画の中で交通事情だけでなく、景観、環境問題、防災、市民参加など広く関わってくる。ではなぜ駅前にこの舗装をしたのか。
回答	平成２０年前後、道路管理者の山口県が交通安全対策として歩道のかさ下げと透水性ブロックに全面改修した。このブロックは多彩な色彩と形状が特徴で景観に優れている。小野田駅前は市の顔であり重要なエリアだから、この舗装を採用した。

論点	平成２８年ないし令和２年の小野田駅前再整備事業において、このブロック舗装の是非は議論の俎上にのらなかったのか。というのも令和３年頃に私は歩道の凹凸についていくつも相談を受けた。
回答	整備対象施設には含まれておらず、また地元の意見要望も特に確認できなかった。

論点	県道の所管は県であるが、市民から県道の歩道の凹凸に苦情が寄せられたとき、市としてはどういう対応をしているか。
回答	速やかに現地で状況確認をした上、応急措置が必要であれば補修材を使ったりコーンを置いたりする。基本的に県に対して位置図や写真をメールで報告したり、電話で情報提供をする。

論点	ブロック舗装を含め、どのような歩道を作るかについては、誰がまちづくりをするのかという問題でもあり、地域住民の声を丁寧にすくい上げていただきたい。
回答	ブロック舗装について、現時点では現状の維持と継続的な補修対応を行っていくつもりだが、将来市道の大規模改修が必要な場合には、地域住民の意見を踏まえて歩道舗装の種類の検討は可能である。

3 市長の施政方針を受けての本市の現状分析について

論点	施政方針で市長は「これからの4年間は、未来に向けての持続可能なまち育てであり、市民がまちの未来に希望を持ち、日々の暮らしに希望を持つことができるまちをつくっていく」。「希望は変化と密接な関係がある。希望を持つためには、厳しい現実から目を背けないことがまず重要となってくる」と述べられた。市長は、本市における厳しい現状、厳しい現実は今どこにあると考えておられるか。
回答	現実を直視したとき、一定規模の人口減少は、受け入れざるを得ず、資源の制約下において、社会、人々の価値観が変化し、地域課題が多様化、複雑化の一途をたどる中、その全てに行政だけで対応することには限界が来ており、厳しい現実として認識をしている。現在の山陽小野田市を未来に向けて変化させていくには、同じ変化を希望する人たちとどんな方向に変えていきたいかという希望をともにしながら、一緒に行動できるかどうかに変化の実現はかかっている。これはまさしく本市が進めている協創によるまちづくりの考え方にほかならないと考えている。